

# 時空の漂泊

(二〇〇五年九月十二日 第十八号)

高橋 滋

## 広島便り7——本体の完成

工事の種類を調べていて、「建築業法」という法律があることを知った。

許可や資格のいる世界だから法律があつても不思議ではないが、法律で建設工事が二十八種類に定められていたのには、「へー」である。「建築一式工事」などを含め、通常の仕事は網羅され、「熱絶縁工事」などのような特殊なものも含まれている。

「土木一式工事、建築一式工事、大工工事、左官工事、とび・土工・コンクリート工事、石工事、屋根工事、電気工事、管工事、タイル・煉瓦・ブロック工事、鋼構造物工事、鉄筋工事、舗装工事、浚渫工事、板金工事、ガラス工事、塗装工事、防水工事、内装仕上工事、機械器具設置工事、熱絶縁工事、電気通信工事、造園工事、削井工事、建具工事、水道施設工事、消防施設工事、清掃施設工事、」

この分類に従うと、私の小屋作りの現状は、「土木一式工事」と、だいたいの「大工工事」と「屋根工事」が終わった段階で、まだ「板金工事」、「内装仕上工事」、「建具工事」などいろいろ残っていることになる。改めて前途は多難だという気分襲われる。

「大工工事」の開始は四月二十二日、五月十七日には本体の枠組の基本が出来上がった。土日を一コマとして作業計画を立てているが、四コマで完了させたことになる。五月初めの連休も含まれているが、それにしても、ここまでは早かった。

それから「屋根工事」に入った。ところが、やってみると、大変だった。



屋根を貼り、構造材の不足部分も充填し、写真の形にするまでに五コマも掛

かった。思っていたよりも時間も使ってしまった。

実を言うと、「大工工事」——それも枠組までの工程は、「難事業である」と想定していて、頭の中で、その手順を何度も練り直していた。しかし、そこから先の工程は、「どうやって作業をするか」の考えがまとまっていなかった。まとまっていなまま作業に入ってしまったもので、試行錯誤に

なつてしまった。そのため、結局、時間を浪費することになってしまった。

### 「屋根工事」

作業手順はまとまっていなかったが、もちろん構造や材料については決めていた。構造用合板を貼り込み、その上にルーフィングと呼ばれる防水材を敷き、屋根材を乗せる。しかし、天井の内張は行わないという方針は決めていた。

この方針で構造用合板を探していたら「化粧野地板」というスギ材があることを知った。「野地板」とは「屋根をふく下地となる垂木<sup>たるき</sup>三上に貼る板」のことで、普通は仕上げや加工は

二 屋根板を支えるため架け渡す長い材

していない。しかし、「化粧野地板」は、一面にプレーナー処理（カンナがけ）がされており、板を重ねる加工<sup>（実）</sup>が施されている。



内側に見える面が出るように、これを直接垂木<sup>たるき</sup>に打ちつけ、その上にルーフィング<sup>四</sup>を敷く構造とした。室内からの見栄えも悪くはない。

三 実（さね）…板と板とをはぎ合わせるとき、一方の板の側面につける細長い突出部。他方の板に細長い溝を作つてこれとかみ合わせる。  
四 フェルトや紙、布の類にアスファルトを浸透させ、防水性を与えたもの。屋根葺などに使用。

屋根の勾配<sup>こうばい</sup>は〇・二八である。つまり水平距離一〇に対して、その高さが二・八になるというものである。中途半端な数字になったのは、ロフト（屋根裏部屋）の高さは一四〇〇ミリ以下、という法規制による。私の小屋は水平距離が五メートルで、そこで「片流れ」（片方にだけ傾斜している屋根）の屋根で、ロフトの高さの限界を確保しようとしたために、こういう中途半端な数字になってしまったのである。

この勾配（角度）を確保する部材の加工は、伝統的には「指矩<sup>さしがね</sup>（差し金）」<sup>五</sup>を使って「墨掛け<sup>すみかけ</sup>」<sup>六</sup>し、それに従つて行ふ。一辺が一尺五寸（四十五セ

五 大工の使う鋼または黄銅製のL字形の物差し。曲尺（かねじやく）  
六 木材から板や柱などの部材を取るために、所要の印や線をつけること

ンチ)の直角の曲尺かねじやくを使うと、それが簡単に出来る。

### 「化粧野路板」の打ち付け

しかし、



その加工は、簡単ではなかつた。「切断機」(写真)というものを使っ

たのだが、角度設定が整数でしか出来ない。そのため実際の加工は、先ほどの勾配〇・二八に最も近い十六度で行うことになった。

しかも、当初、ぼんやりと考えてい

た「垂木たるきの上に乗って野地板のじいたを打ち付ける」作業は、現実にはとても不可能だった。傾いた幅四十ミリの平均台の上でバランスを採りながら作業するようなもので無理だった。

結局、一番高い部分はまずロフトに床を貼り、そこに脚立を置き、それに乗って、垂木たるきの間から体を乗り出し、「野路板のじいた」を垂木たるきに打ち付けるという形で作業を行うこととした。

脚立を左右に動かし、実さねの重なり具

合や板の平行度を確認して打ち付ける。それを脚立のぼの上り下りおを何度も繰り返す。屋根の長さは六メートルあり、計算では板を四十四段(百三十二枚)取り付ける必要がある。ちょうど児童公園のジャングルジムの中で仕事を

しているようなもので、かなりの労働だった。

板を打ち付ける前に、まず材料を所定の長さに切り揃そろえて運び上げると、いう準備作業があるが、やってみると、これも大変だった。板の長さは場所によつて少しずつ違い、単純に切り揃えることが出来ないからだ。一回、家人に手伝ってもらったが、この時は能率が倍増した。「屋根工事」はチーム作業が基本のようである。

ともかく、この作業は難航し、なかなか目標枚数の板を打ち付けることが出来なかった。慣れて単純作業のようになつたら、注意不足から平行度や表裏の間違いなどのミスを犯しそうになる。さらに末端の板の幅が狭いと

強度が不足するため、板幅を少しずつ調整しながら最後の末端の板の打ち付けを行わなければならないという問題にもぶつかった。

## 「天窓」に挑戦

思い付きで「天窓」を設けようと決めたことも「屋根工事」をさらに難しいものにした。

本体の枠組みを立てていた時、ロフトの部分からの景色が下とはずいぶん異なることに気がついた。建築家の吉村順三は建設予定地でのロケーションや高さを、高い台に上り、その景観から決定したというが、何故、そうしたかが分かった。空が広く、遠くを見晴るかせて気分がすこぶる良い。

「これがツリーハウスの魅力か」と改めて思った。

そんな話をしたところ子供が「天窓を作ったら」という。その時は無理だといなしたが、しばらくしたら「折角の機会だから挑戦してみよう」と気持ちが生まれてきた。

素人は「天窓」を希望したが、プロは勧めないという。最近では工法が進んだのか、屋根裏の有効活用のためなのか、「天窓」を設ける例は少なくない。それでも、防水対策の問題だけではなく、結露の原因になるということもあって、家を痛める元凶だと現在でも言われている。

しかし、怖いもの知らずの素人であ

る。ついに「天窓」に挑戦することに決めてしまった。「野路板」に「天窓」のために開けたハッチ七のような部分に枠を作り、「野路板」<sup>のじいた</sup>との隙間をコーキング<sup>ハ</sup>でふさいだ。

さらにアルミニウムの薄板で枠のカバーを作った。それが「野路板」<sup>のじいた</sup>の上に貼る「ルーフィング」の、さらにその上に貼る「屋根材」の上に重なり、それを伝わって水が流れるような構造に加工した。

これは、まさに「板金工事」である。やっていたら、突然、中学の頃、苦勞して板金で「塵取り」<sup>ちりと</sup>や筒状の「火おこし」を作ったことを思い出した。

<sup>七</sup> 船の甲板の上げ蓋のついた昇降口。

<sup>八</sup> 窓枠の周囲、部材の接ぎ目などの小さいすき間にパテ状の充填材を詰めること。また、その充填材。

## 材」——「アスファルト・シングル」の貼り付け

トを含浸させ、表面に色砂を圧着したもので、スレート屋根のような硬さはないが、カッターで切れるなど取り扱いが容易だからだ。

う訳にはいかない。いわゆる「法二条区域」<sup>九</sup>と呼ばれる地域指定があつて、住宅が建っているほとんどの地域では、屋根は防火性能を持つ「屋根材」で葺<sup>ふ</sup>かなければならないと規制されている。

そこで「屋根材」には、その基準に合致する  
を使うことにした。これは、軟質の構造材（繊維基材）の両面にアスファルト

<sup>九</sup> 防火および準防火地域以外の市街地にある建築物に対して、類焼の防止を図る目的で指定される区域。指定区域内の建築物は、通常の火災の火の粉による類焼を防止するため屋根を不燃材等で葺かなければならない。

もつとも、これも国土交通省（旧建設省）の耐火性を含む認定を得ている製品でなければならない。ホームセンターでは様々な製品が販売されているが、この点のチェックは怠つてはならない。とくに輸入品には認定を取っていないものもあるらしく、その選定には注意を払った。

そして一枚の横幅が九百十五ミリという中途半端な寸法の製品を使うことに決めた。日本製にもかかわらず、ヤード・ポンド法に準拠しているような製品である。ヤード・ポンド法だと



三十六インチで、一般的なもののように思う。多分、もっぱら輸出されているもののため

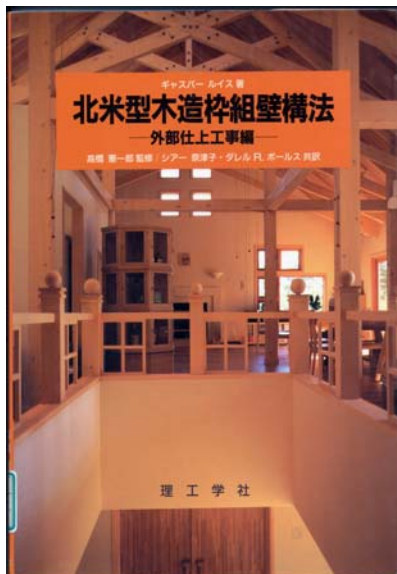
なのではないかと思う。

「アメリカでは八十%がアスファルト・シングル」という記述もあつたぐらい「屋根材」では「アスファルト・シングル」はメジャーな材料のようで、日本とは事情がまったく違う。そのためだろう。

を使うことは決めたものの、寸法がヤード・ポンド法に準拠しているというだけではなく、その貼り方をうまく説

明した日本語の本もなかった。

例えば「北米型木造枠組構法」（ギヤスパール・ルイス著、理工学社）という四分冊構成のアメリカの大工向けの詳細な教科書も見付けたのが、それでも問題は解決出来なかった。



それには

の貼り方の項もあるのだが、何度読んでも要領を得ない。翻訳の問題や市場で入手可能な材料の差異もあるのだろうが、ともかく次ぎに一部を紹介する通り、何とも分かりにくい。

### 三・アスファルト・シングルの裏打ち（スターター）の列

アスファルト・シングルの裏打ち（スターター）の列は、アスファルト・シングル材を支持し、つぎの列に葺くシングルのタブとタブとの間のギャップを埋める役目をする。裏打ちの列に使用するシングルの端から少なくとも3インチを切り取り、工場で塗装された接着剤を使用して接着しながら、屋根の下端に沿って葺いていく。シングルの継目や、

#### 3. アスファルト シングルの裏打ち（スターター）の列

アスファルト シングルの裏打ち（スターター）の列は、アスファルト シングル材を支持し、つぎの列に葺くシングルのタブとタブとの間のギャップを埋める役目をする。裏打ちの列に使用するシングルの端から少なくとも3インチを切り取り、工場で塗装された接着剤を使用して接着しながら、屋根の下端に沿って葺いていく。シングルの継目や、第1列のタブの切り目のところに継目がこないようにして葺き始める。けらばのトリムが鼻隠しから外へ出っ張っている場合には、4~5インチ幅のシングルのタブで、けらばのトリムの上端を覆う（4-11図）。木製シングルを、タブの下側に取り付けて支えとする。



4-11図 シングルのタブを切って、けらば側のトリムの出っ張っている部分にかぶせる。

第一列のタブの切り目のところに継目がこないようにして葺き始める。「けらば」のトリムが「鼻隠し」から外へ出っ張っている場合には、四〜五インチ幅のシングルのタブで、「けらば」のトリムの上端を覆う（四・十一図）、木製シングルを、タブの下側に取り付けて支えとする。

「工場で塗装された接着材を利用して接着しながら」とは、どういうことなのか？ 「木製シングル」とは、どういうものなのか？

すべて、こんな調子である。屋根面の周辺には「水切り」という金物（「役物」の一つ）三を付けなければならぬが、その取り付け方（「ルーフィング」との上下関係）の記述もハッキリしない。別に手に入れた本に書かれて

○ 蟻蝨羽。切妻屋根の端の部分。  
 二 軒先の垂木の端を隠すためにつける横に長い板。  
 三 「水切り」とは、建築で、雨水が壁の方に回り込むのを防ぐための溝。「役物」とは、屋根面のあらゆる端部で、納まりのために使用される部材の総称。

いることと違っている。

結局、いろいろな本にあたって調べたのが、ハッキリせず、自分が実際にやってみて、初めて分かったというのが実情である。

振り返ると、それは自分自身に基礎知識が欠けていたことによるところも大きいと思う。例えば、恥ずかしながら「屋根材」は単純に貼れば良いと思っ込んでいた。

「重ね代」かさねしろ

「スターター」

は省略するが、前述のテキストではこ

れを「裏打ち」という言葉で一括りにしていたが、それだけでは、私のように、初めて に挑戦する人は間違いなく勘違いはするし、戸惑うと思った。

もう一例をあげると、要所は「セメント」で念入りに接着する必要があると参照した別の本には書かれていたが、これも誤解を招く説明だった。「セメント」と言われると、私は直ちに石灰石を原料とするコンクリートを思い浮かべてしまったが、そうではなく「接着剤」のことだった。

確かに、英文中で「セメント」(cement) という言葉が出てくれば、

広く「接着剤」を指している言葉であると注意するのだが、日本語のしかも

建築関連の本で「セメント」という言葉が出てくると、コンクリートを連想してしまう。しかし、「屋根材」の貼り付けに関する説明で使われていた「セメント」という言葉は、コールタル<sup>三</sup>のような「接着剤」を指しており、これが「接着剤」と書かれていれば、何も問題はなかったのだが、「セメント」と書かれていたため勘違いさせられてしまった。

「屋根材」の貼り付けは「重ね代」が多いため、思ったよりは「抄」<sup>はか</sup>が行かなかつた。「抄らない」<sup>はかど</sup>のである。

想像以上に、「屋根工事」は高所作

<sup>三</sup> coal tar 石炭を乾留したとき生成する茶褐色または黒色の粘りのある液状物質。最初の用途は防蝕剤。大航海時代以来、帆船の用材やロープの塗装用として使用された。続いて鉄道建設が盛んに行われた時代には枕木の塗装用に使われた。

業だった。勾配はたかだか十六度で、滑り落ちるほどではないはずなのに、ツルツと滑ったら、止まらないで落ちるのではないかという気持ちを払拭できなかった。どうしても慎重になつてしまう。

### 「屋根材」の

を貼る前に、まず防水用の「ルーフィング」を「野路板」の上に貼つたが、この作業を行った時には、具合が分からないので、まず初めは濡れたタオルを靴の下に敷いて様子を見た。乾いた板は滑りやすいからだ。

さらに命綱も使った。次第に傾きに慣れてきたのだが、下を向いて作業をしていたら、「ふと立ちくらみでもしたら」という気持ちに襲われたからだ。

一人では危ないのではという周囲の声も無視できなかったこともある。

屋根の仕事を全部終わつたときは、心底ほつとした。そして冒頭の写真を撮ることが出来たのは六月十七日のことであつた。その前の週に梅雨入りの宣言が出たものの幸い雨が降らなかつたので、「梅雨入りまでに屋根を」という最初の目標はなんとか達成することが出来た。

### いよいよ室内作業に

という気持ちになり、翌日は、久しぶりにガーデンの仕事をした。

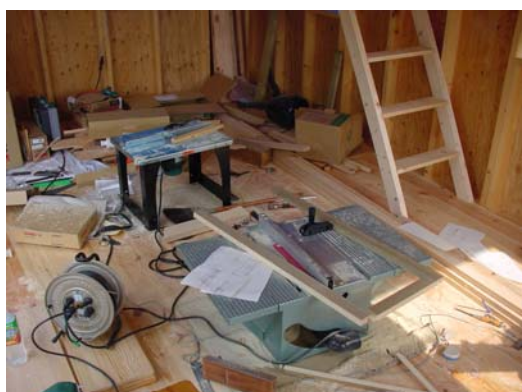
続いて気持ちを新たにして次の二コマで、床の取り付けと塗装（オイル

仕上げ）に取り組んだ。通常、ツーバイフォーでは、基礎工事の後に床を貼り、作業場所を確保する「プラットフオーム工法」と呼ばれる作業工程が採用されるのだが、そのために掛かる工期と梅雨との関係を考えて、「屋根工事」を先に持つてきたからである。

しかし、作業工程を変えたため仮の床の上で作業をすることとなり、脚立が安定せず、結果として「屋根工事」

で苦労させられることになつてしまつた。

床がついた段階







いたのだが、  
ようやく半  
袖で仕事が  
出来るよう  
になった。  
新しい機  
械を使って、

で、新規に購入した木工機械などを搬入した。テーブルソー、ルーター、小型の角ノミなど最低限の装置である。機械がそろってようやく仕事場らしくなった。

早速、出入口や窓の建具などの製作に取りかかった。

屋根の下での室内作業になって、作業はグンと楽になった。今までは、切断機を使つてのカットも炎天下での作業だった。この歳になると日焼けも辛いので長袖のシャツを着てやっていたのだが、ようやく半袖で仕事が出来るようになった。新しい機械を使って、

念願の「天窗」周りの作業も終えた。完成した「天窗」は、まるで海原を翔けるヨットのハッチのように思えた。嬉しくなつて出来上がった「天窗」から身を乗りしたら、昼間なのに、流星の観察ができるかもしれないと、ふと思った。